

アダム・タカハシ

「魂の不死の哲学 [第三回] プロティノス『エネアデス』」

Adam TAKAHASHI

“The Immortality of the Human Soul, 3: Plotinus’s *Enneads*”

論文要旨

紀元後三世紀の哲学者プロティノスは、プラトンの影響のもとに「魂の不死」の教説を自身の著作『エネアデス』のなかで展開した。時間的な現世とそれとは切り離された不変的な叡知界の存在、そして後者の世界へと回帰した魂の不死性の肯定にかんして、プロティノスはプラトンの教説を忠実に踏襲している。プロティノス固有の議論がうかがえるのは、むしろそのような神的世界を本来の住処とするはずの魂がなぜこの世界へと降下し、さらに個々の人間の魂へと受肉してしまったのかという〈下降面〉の議論においてであった。魂の降下の理由を「翼の喪失」という受動的事態に帰したプラトンと異なり、プロティノスは魂自身の自発的な「欲求」あるいは「向こう見ず」な「自由な意志」こそがその原因だととらえた。こうして現れるのは、善と悪の双方へと向かいうる精神の自由な「力」を現実的なものとみなす哲学の姿である。さらに、彼は「永遠と時間」という二項の対立を前提とした上で、永遠から時間が成立することを魂の降下と連動する事態として語った。プロティノスの思想を通して、人間に不合理な力がやどっていること、そして人間の存在が本質的に時間的性格を有することが、はじめて形而上学的に明確な輪郭を与えられたのである。

魂の不死の哲学「第三回」プロテイノス『エネアデス』

アダム・タカハシ

「人々の魂は、いわばディオニュソスの鏡に写っている自分自身の影を見て、あの上方の世界から飛び降り、影の世界へと入ってきたのである。」

『エネアデス』(IV:3, 12)

紀元後三世紀の哲学者プロテイノスによれば、「魂の本当の目覚め」とは「肉体を伴って起きあがること」ではなく、「本当に肉体から出て起きあがること」だという(III:9, 9)。ひとが朝を迎える目覚めは、たんに「一つの眠りから別の眠りへ」あるいは「一つの寝床から別の寝床へ」の移りかわりでしかない。それに対して、本当の目覚めは「肉体から完全に離れて起きあがること」、すなわち肉体そのものから魂が離脱することだと彼は言うのだ。

魂とは、その基礎的な意味としては、生きているものに宿る生命の原理を指している。だが、プラトンはそれに生命活

動の源以上の意味をあたえた。彼によれば、魂こそが或る特定の人物の自己自身あるいは本質である。私たちは、肉体的なもの——そこには感覺的なものや情念的なものが含まれるだろう——に惑わされず、自己自身であるところの魂に専心に配慮することで善き生を送ることができる。ひとは自らを情念的なものから解き放ち、清浄な魂となって真なる実在を觀るように努めることが肝要だと、少なくとも『パイドン』では主張されていた。

プロティノスが、魂の肉体からの離脱を説くかぎり、魂あるいはそれによって規定される人間存在を、プラトンの思想の枠内で考えていたことは明白である。だが、アリストテレスが師からその不死性の教説を受けつぎつつも、単に人間の魂の本性を語って終えるのではなく、「理性にもとづく魂のはたらき」として人間が果たすべき生の姿を語ることにへと向かったように、後続の哲学者たちにとって、プラトンが提示した考えは議論の始点であっても終点ではなかった。当初の説とは微妙に、あるいはそれとは大きく異なるところに力点が置かれることで、不死性の教説は別の形態をもつ思想を生み出すことになったのである。

そこで問題となるのは、ではプロティノスは、魂の不死性の教説を起点として、いかなる思想を生み出したのかという点である。「魂の不死」とはいっけん真逆の印象をあたえるかもしれないが、その教説を敷衍することで彼が注視したのは、永遠かつ不死なる世界から魂がこの世界へと降下したという事態とその理由であった。プラトンは魂が「翼」を喪失することで落下したという説明を『パイドロス』(246c2)のなかですでに与えている。このような喪失による降下は、魂にとっては避けようがない受動的な出来事ではなかった。それに対してプロティノスは、後段で見られるように、魂が自らの欲求あるいは意志にしたがって、この世界へと降下したと主張する。さらに、彼はこの降下の主題と関連付けながら〈永遠〉から〈時間〉が生み出されたとも述べるだろう。この小文では、魂の不死性の教説を受けついでプロティノスが、

それと逆行するかなような魂の下降の局面を描くことで、人間の精神にも宿る不合理な力と人間存在の時間的な性格に光を当てたことを論じることにしたい。

以下の全体の流れとしては、プロテイノスの『エネアデス』のうち、まず「魂の不死について」(IV.7)を検討することからはじめ、次に「魂の肉体への降下について」(IV.8) および「三つの原理的なものについて」(V.1)を見ることで、魂のこの世界への降下および受肉を彼がどのように語ったのかを分析する。最後に、この魂の降下という主題と時間論との関係を「永遠と時間について」(III.7)をもとに考えたい。本稿での『エネアデス』の引用は、すべて中央公論社版の『プロテイノス全集』からであり、引用の際にはその論攷番号と章番号のみを記す(例えば、本稿中で(III.7.2)とあれば、『エネアデス』(III.7)「永遠と時間について」の第二章を意味する)。

「魂の不死(ψυχή)」(IV.7)

論攷「魂の不死について」を、プロテイノスは「われわれ各人は不死なのであるか、それとも跡形もなく死滅してしまう」のかと問うことから始める(IV.7.1)。彼によれば、その問いに答えるためには人間そのものがどのような本性をもっているのかが明らかにされなければならないという。もし人間が単なる物的なものではないならば、それは可視的な死とともにすべてが消滅してしまうだろう。それに対して、ひとが物的なものとは「別の種族に属する」(IV.7.2)ものであるならば、物理的な死滅を超えて存続することが起こりうる。

そこで「魂の不死について」では、魂を物的なものだと説く論者たちへの批判がまず行われる。たとえば魂は「原子」(アトム)の集合体であるという説、あるいはそれを空気や氣息と同一視する立場などである。このような立場への

反論のあとに、彼は「魂が物体とは異なる本性のものである」(IV.7.8)と改めて記したうえで、その本性をさらに探っていく。その過程で、魂を物的なものそれ自体とは考えないが、物的な元素の「調和」から成立するものだという考えや、アリストテレスのように魂を身体の或るはたらき——それは「現実態」(エンテレケイア)と称される——と同一視する見解も批判される。

このように魂を物的なもの、あるいはその或る種のはたらきのようなものとして考える立場に批判を加えたあと、プロティノスは彼自身の見解を述べる。彼によれば、魂とは「第一義的な意味で生命活動を営んでいる原理的なもの」であり、それは他のものにとつての「生命の源」である。そして、それ自身が生命を持つがゆえに、そのものとしては「不滅であり不死である」のでなければならぬという(IV.7.9)。このような魂がそれ自体運動を有する生命であり、かつそれが不死であるという見解は、プラトンが『パイドロス』等で述べた見解を忠実に踏襲するものである。また人間の魂が不死であるというプラトンの見解についても、プロティノスが同意していることは疑いようがない。魂は自らが叡知的なものとして存在することで、それ自身において真実在に触れることができる。そこから、魂が「どこか外を走り回って節制や正義を観るのではなく、自己自身が自己自身とその以前の状態を知ることによって、自己自身のところで(それら真の知識を)観る」(IV.7.10)とも述べられるだろう。

単なるプラトンの教説の反復を超えて、プロティノス固有の議論がはじまるのは、右に記したような魂の基礎的な定義、あるいはその不死性の肯定がいったんおわたた地点においてである。肉体と異なり「それ自体で生きているもの」であり、「それ自体で有るもの」としての魂は、いったいどこから生まれ、どこへと消えていくのか。プロティノスは、叡知的な世界を住処としていたはずの魂が、この世界へと、そして個々の肉体へと降りたつに至った事態を正視する。たし

かにプラトンも「翼の喪失」(『バイドロス』240c2)が、魂のこの世界への降下の原因であると語っていた。だが、プロティノスは、その降下の理由を解かれるべき〈問題〉として示すのである。

「では、知性的なものが肉体から分離して存在しうるものであるとすると、そのわれわれの魂が、どうして肉体へと向かうのであろうか」(IV,7,13)

本来的に不死なる魂であれば、叡知的な世界にいつまでも留まりつづければ良いはずである。だが、それがこの世界へとわざわざ降下してくるとすれば、そこには何かしらの理由が必要になる。では、その降下の原因をプロティノスはどのように説明したのだろうか。彼によれば、魂は「欲求」(オレクシス)をあわせ持っていることで「はるか下方の世界へと進んで行って、知性界で見たものにしたがって(感性界を)秩序づけようとし、いわば知性界の諸真実によって孕める者となって生みの苦しみにとらわれ、制作し創造しようとする」という(IV,7,13)。魂のこの世界への降下は、単にその「翼の喪失」という事故に起因するものではなかった。むしろ魂自らの自発的な「欲求」にもとづくものだと言われるのである。

だが、提起された問いは解かれていないように思われる。叡知的世界を住処としていたものが、どうして下方の世界を目指す「欲求」をもつに至ったのか。ただし、議論を先に進めるまえに、現世あるいはそれに内属する肉体が、魂の存在にとって肯定的なものとして語られる思想も、プロティノスはプラトンから受け取っていたことを確認する必要がある。それは『ティマイオス』で示された立場である。このプラトンの宇宙論的著作では、現実の世界自体が「祝福された神」

(34b) と形容され、「魂はこの宇宙が知性をそなえたものとなるように、善き制作者から遣わされた」(29a)とも語られる。この考えによれば、魂は現世を叡知的な世界に似たものとするために、宇宙の制作者である知性(デミウルゴス)によって派遣されたということになる。この『ティマイオス』からは、魂と現世との肯定的なつながりの論理が導かれるだろう。

だが、プロティノスが魂の降下する動きに見たのは、単により上位の知性体によって魂が現世へと派遣されたという受動的状態ではなかった。彼は、魂自身の自発的な「欲求」として現世への降下と世界創造にたいする「生みの苦しみ」を唱えたのである。それゆえ、『ティマイオス』を確認してもなお、なぜ魂が叡知的な世界に安住する道を選ばずに、この世界へと降下したのかという不合理性が謎として残りつづける。とはいえ、「魂の不死性について」のなかでは、その「欲求」の中身についてはそれ以上の説明はない。そこで、この魂の降下に言及している別の論攷、すなわち「魂の肉体への降下について」および「三つの原理的なものについて」を参照することで、この論点にかなする彼の思考をさらに追うことにしよう。

『魂の肉体への降下(トポψωστ)』(IV.8)・『三つの原理的なもの(トποψωστ)』(VI.1)

タイトルから魂の降下の謎を解きあかすものと期待されるのが、論攷「魂の肉体への降下について」である。その冒頭の文章からは、『パイドン』や『パイドロス』で展開されたような、魂の肉体との交わりについての否定的な立場と、『ティマイオス』における「祝福された神」としての現世の肯定の立場との相反性を、プロティノス自身も明確に意識していたことが理解される。その二つの教説をつなぎ合わせることで、彼は「魂の肉体との交わりはもともとどのような

て行われるのか」(IV.8.2) という問いを、『ティマイオス』の見解を踏まえて「この宇宙をどのようなものとみなさねばならないか」(同右) という問いと重ね合わせながら考察しようとする。

ただし、この魂の降下を主題とするはずの論攷「魂の肉体への降下について」であるが、その降下の原因として語られる話自体は、先の「魂の不死について」で述べられていた論述の範囲を大幅に超えるものではない。ただし、表現上の相違は見られる。プロティノスによれば「魂は神的なものであるとはいえず、上方の世界から降下して肉体に宿るのであり、(知性界の末端に位置を占める) 下位の神であるから自己自身の自由な意志で下に傾き、自己自身の力ゆえに自分の後にあるものを秩序づけるべく、肉体へと降下しもある」(IV.8.5) という。先程は魂の「欲求」として語られていたものが、今度は魂自身の「自由な意志」あるいは「自己自身の力」によるものだと主張されるのである。

さらに、魂の降下の原因については、「プロティノス哲学への入門書的人格」をもっているとも評される論攷「三つの原理的なものについて」のなかでも若干の示唆がなされている。このタイトルに含まれる三つの「原理的なもの」(ヒュポスタシス) とは、「魂」、「知性」、そして「一者」の三者である。プロティノスにかんする教科書的な叙述でも頻繁に紹介されることだが、彼は私たちの肉体にも宿っている生命の原理としての魂と、それを生み出す理念的な存在者であり、上方の世界に不変的に存在する神的な「知性」(ヌース) に加えて、さらにその知性を超えた地点に「一者」(ト・ヘン) と呼ばれる超越者を置く思想を展開した。その「一者」は「善」そのものとも称される。ただし、このような超越的な一者を、この世界の究極的な始原とみることは、プラトンの言葉に忠実に従うものでしかなかった。というのも、後者自身が『国家』(509b) のなかで、知性界の彼方にそれ自体は可知的ではない善が存在すると主張したからである。とはいえ、本稿ではこのような原理的な三者の形而上学的な意味合いについては紙幅の関係上さらなる論究は控えたい。あく

まで焦点を当てたいのは、魂が叡知的な世界からなぜ降下したのかという問いと、それに対する彼の回答である。

論攷「三つの原理的なものについて」は全体としては、邦訳版の全集の解説者が述べるように、魂が叡知界を本来の住処としていたという出自と、その源泉への還帰の必然性を論じるテキストである。知性が「魂の父親」として語られ(V.1.3)、魂は叡知界という「もっとも真実在の多い世界へと昇って行って」(V.1.4)、そこにて真実在を觀なければならぬと主張される。そして、前段で示したように、その「知性」のさらに彼方に「一者」が存在することも言われる。それらの説の根拠として、プラトンが召喚され、「プラトンは善から知性が出、知性から魂が出ていることを知っていた」とプロティノスは告げる(V.1.8)。

では、このような世界の構造、三つの原理的な実体についての見解が前提とされた上で、私たちが着目している問いには、どのような議論がなされるのだろうか。「どうして一者が自分だけにとどまっていなくて、これほどの多が流れてしまったのであろうか」(V.1.6)とプロティノス自身も問う。その問いを、魂の場合に置きかえると、魂が本来の場所である不変の世界にとどまらず、現世において個々の魂を生みだすに至ったことが謎として前景化するだろう。実際、魂、知性、そして一者という原理的な三者が論じられる、この論攷のはじめに置かれていた問いも、実はこの魂の降下についてのものであったのである。

「はたしていったい何ものが、魂に父なる神(＝知性)を忘れさせてしまったのであろうか。……この自分勝手にふるまいうることのよろこびというものは、一度魂がこれをおぼえたと見えてから、その自己主動性の濫用というものはすではなはだしいものがあつたのであつて、魂は逆の一途を急転して、非常に遠くまで離反してしまつた……。」

「魂の不死について」では「欲求」として、また「魂の肉体への降下について」では「自己自身の自由な意志」として語られていたものは、ここでは魂の「自分勝手」な振るまいとして語られている。魂は自らの欲求に導かれて善なる世界から離脱し、急転直下でこの世界へとやってくる。それはある面では、『ティマイオス』で示されたこの世界の創造と秩序付けという摂理的な配慮とも解されるだろう。だが、魂の本性に即して考えれば、それは非常に「自分勝手」な欲求でしかないのである。

プロティノスの形而上学というと、超越的な一者からの一切の流出とそこへの還帰という垂直方向の往復にかんする思想をひとは想起するかもしれない。だが、彼の議論の固有さはむしろ魂の降下という不可解な出来事を強調する点に現れているのではないか、私はそう述べてきた。このことは、もちろん私だけが注目していることではない。後段で取りあげるハンス・ヨナスもそうだが、本邦でも井筒俊彦は魂の降下をめぐるプロティノスの問い、あるいはその議論から帰結した彼の思想の独自性に注意を促していた。『神秘哲学』の中で、「魂の肉体への降下について」の一節を「抑々いかにして私はかくの如く下降して行くのであろうか」と井筒は訳しつつ、この魂の下降の局面を形而上学的に思考したことは「ギリシア哲学史上実に空前の試み」であったと記す（『神秘哲学』、二七八頁）。さらに、井筒は次のようにいう。

「一者」から分裂して絶対無の境域を離れ次第に現実性の意識を取りもどしつつ、謂わば肉体の裡に息を吹きかえして来る、その体験的下降自体に異常なる哲学的意義が認められているのである。（『神秘哲学』、二八〇頁）

魂の不死性、あるいは魂が由来する叡知界のさらに上方に位置する「一者」の思想、そういったものがプロティノスに見られるとしても、それらはプラトンの語彙を撰取した上で構造的に組みかえたものでしかない。だが、そのような叡知界からの魂の離脱、本来神的な真実在に合一したままであるべきところの魂の現世への落下、その不合理な欲求を形而上学的に思考したところに、プロティノスの哲学史に占める独自性があつた。

ここまで『エネアデス』から三つの論攷を見ることで、プラトンでは魂の肉体からの離脱を説く思想であつたものが、プロティノスでは魂が不合理なかたちで下降してくるという逆の局面に「異常なる哲学的意義」が置かれる思想として変奏されたことを見た。降下の理由は魂の「欲求」であり、「自由な意志」であり、「自分勝手な振る舞い」であり、その理由をさらに因果的に説明することは困難である。その不合理な欲求のさらに奥にある理由を見出そうとすれば、井筒のようにプロティノス個人の神との合一とそこからの回帰という「体験」を引き合いに出すしかないだろう。

このように因果的な説明を拒む事柄ゆえに、魂の降下の欲求がさらにいったい何に起因するのかという問いにかんする議論は、いったんここで終えることにしたい。その代わりに、この魂の降下の論点とかかわる別の思想的局面に読者の注意を促すことにしよう。もし魂の降下が形而上学的に語られるだけであれば、その話は一つの寓話の域を出なかつたかも知れない。だが、プロティノスにおいては、その魂の降下の問題は、もう一つ別の問題系へ接続されることで、それまでの哲学とは異なる思想的な風景を生み出すことにつながるのである。それは「永遠と時間」とは何かという問題である。

「永遠と時間について」(III.7)

論攷「永遠と時間について」を、「魂の降下」の問題の観点から読みとくことは、すでにハンス・ヨナスが『ゲノーシスと古代末期の精神』で述べたことである。ここでの私の議論は、ヨナスの「古代末期」の思想をめぐる壮大な議論の粗雑な反復でしかないことをあらかじめ注記したい。

そもそも「永遠と時間」という二項の問題設定自体も、プロティノスはプラトンから受けついだものである。『ティマイオス』(37d)にて「時間は永遠の動く似姿として作られた」とすでに述べられているからである。ただし、後述するように、プロティノスは、永遠と時間との関係を、永遠的な「生命」と時間的な「魂」との関係から説明することで、結果的にプラトンは異なる立場を示すに至るのである。

「永遠と時間について」の冒頭で「永遠(アイオーン)とはなんである」のかとプロティノスは問う(III.7, 2)。彼にとって「永遠」とは、純粹なる「現在」としてまず定義される。

「かつて過ぎ去りはしなかったし、また今後生じるであろうこともなくて、まさにあるべきものとして現にあるのだから。」(III.7, 3)

永遠においては、何一つ過ぎ去ることも、未来において初めて到来するものもないのである。ただし、彼は永遠をこのような過去・現在・未来という時間との対比で論じるだけではなく、それを「生命」(ゾーエー)としても描き出していく。

「有るものに宿る（生命）、「ある」における（生命）、全体が一緒にあり、充実していて、いかなる方向へも延長を欠く生命、これこそが我々の求めているもの、すなわち永遠だということになる。」(III,7,3)

永遠は叡知的な世界における「生命」として定義される。永遠は、あらかじめ存在する神的な知性へと補足的に加えられるものではない。むしろその存在の根拠となっているものである。そして、その永遠性を実体的に捉えると、それは生命として認識されるということなのだ。永遠にかんするより最終的な定義でも、プロティノスは「永遠とはすでに全体的であることによる無限の生」(III,7,5)であり、「自己の実有あるいは生によってある」(III,7,6)ものだと、永遠と生命との同一性に繰りかえし言及するだろう。

重要なことは、永遠が一つの生命であるとしたら、その似姿として生まれる時間も一つの生命だということである。プロティノスの時間論が、プラトンから議論の骨格を受けつぎつつも、より独自のものとなる理由は、それが一種の生命論として語られる点にある。彼にとって、時間とは叡知界そのものである永遠の生命が、この感性的な世界へと降下した姿であった。ここまでいえば明らかだと思われるが、そうであれば「永遠・時間論」は、そのまま叡知界からの魂の降下の話と重なってくるのである。実際、永遠を定義したあとに、時間を問うプロティノスも「われわれは永遠から時間の探求と時間とへ向かって降りていかねばならない」(III,7,7)と、ふたたび「降下」の局面にわたしたちの注意を促すのである。

プロティノスが時間を定義するにあたり主に論敵とするのは、時間を「動き」としてとらえる立場である。特にそこで

想定されているのはアリストテレスが論じたような、時間を動きの数とみなす見解である。だが、プロティノスにとって、時間とはや運動、たとえば、それは天球の運動との関係で語られるようなものではなかった。時間をものの動きあるいはその数として捉えることは、まず世界が存在し、その前提の上で世界とのアポストオリな経験の上から時間を定義することではない。彼にとつての時間とは、むしろ世界の成立に先立つもの、あるいは世界そのものを現出させるものであった。そのことを理解するには、「永遠」からの「時間」の出来を彼がどのように語ったのかを見なければならぬ。

過去の説を批判したあとに、プロティノスは「時間が何であると信じねばならないかを述べる」と宣言する(III, 7, 10)。彼の時間論で最も特筆すべきことは、この世界に時間を生み出すのは、永遠の叡知界から降下した魂であるという点である。永遠が不死なる生命であったように、時間とはその生命体が降下した魂そのものなのだ。時間は、単に時計によって測られるクロノロジカルなものでははやない。それは、永遠なる世界を本来の住処とする魂が、その自らの欲求にしたがって垂直的に落下する過程で生み出すものなのである。

そのような魂による時間の創出を最も端的に示すのは、魂自体が「自己を時間化(クロノオー)」(III, 7, 11)することでそれが成立するとプロティノスが語る場面である。プラトンにとつて、時間は世界の制作者である知性によって作られた永遠的なものの似像でしかなかった。だが、プロティノスにとつては、時間は単に永遠の似像として制作されたのではない。落ち着きのない魂が、自己を時間化し、それによって自らを時間的なものとして現世へと生み出すのである。プロティノスは、魂が「余計なこと好きな本性」としてあり、「現にあるよりもっと多くのものを求めることを望ん」だことで、時間もこの現世の運動のなかへと生み落とされたという(III, 7, 11)。魂には「落ち着きのない一つの能力」(同右)が存在するとも言われる。ここでも重視されるのは、魂が自らの欲求、力によって叡知的な世界から離脱あるいは降

下する局面であり、そしてその垂直的な降下の過程で、魂が時間と、人間も含む時間的な諸存在を生み出すことなのである。プラトンとプロティノスの議論を対比させながらハンス・ヨナスは、次のように述べる。

「プラトンは、時間は合理的な意図……であり、非合理的な形であらかじめそこにあった空間と結びつくことによつて、その空間に規則正しい運動を与えて、存在の合理性に与らしめるものである。ところがプロティノスでは、時間はそれ自体が非合理的な起源のものであつて、一つの落ち着かない、中心からの離脱を求める原理の「向こう見ず」（トルマ）が生み出す産物である。」（『グノーシスと古代末期の精神（第二部）』、三八四頁）

プロティノスにおいて、時間を生み出すのは魂の落ち着きのなさであり、それはその本性ゆえに多様なものを不断に生み出していく。ヨナスによれば、そこに時間論の決定的な転回があつたという。「無限の一連の変化に向かつて限りなく開放された地平という本質的に非古典古代的な概念が、史上初めて姿を示し始める。すなわち、それは近代の非合理的な時間と力の概念に他ならない」（同上）とも彼はいう。魂は、一者に由来する叡知界から出来し、そしてそこへと回帰しようとする。だが、そもそも魂がこの世へと到来するのは、分裂的な欲求あるいは意志の結果ではない。プロティノスは、この不合理な力が永遠的な現在からの時間の出来の原因とも語つた。こうして時間論、生命論、そしてそれを貫く「力」の概念が、プロティノスの体系の中では一つの枠組みで論じられるのだ。

『パイドン』や『パイドロス』における魂の肉体からの離脱の肯定と、『ティマイオス』における現世あるいはそこに内

在することの肯定、この二つの肯定は明らかに真逆のメッセージを発している。その二つを受け取ったプロティノスの思想には、形式上の骨格だけを取り出すならば、超越的な始原からの流出とそこへの回帰という二つの逆のベクトルの運動が見られることになるだろう。しかし、そのような骨格だけに注目するならば、この世界の成立の端緒を彼が繰りかえし問題としたことの意味を見逃してしてしまう。魂が現世へと降下してくる、その理由はプラトンにとっては「翼の喪失」という単なる事故でしかなかった、あるいはデミウルゴスによる派遣という撰理的な配慮の帰結でしかなかった。いずれにしろ、降下してくる魂にとっては受動的な事態でしかなかった。だが、プロティノスはその降下を一つの〈問題〉として受けとめたうえで、その理由を魂の自発的な欲求に求めた。

人間はなぜ善なる世界を目指すのではなく、そこから離脱する、すなわち悪の方向への抗い難い欲求、意志をもってしまふのか。この問いは、プラトンとアリストテレスによつては決して提起されない類の問いであった。そのようなアンビヴァレントな欲求の存在は、私たちの精神を——アウグスティヌスの言葉を用いれば——常に「不安」(inquietum)な状態へと墮とし込むだろう。不死なる魂の教説を受け取ったプロティノスは、それを起点としつつも結果的には私たちの魂に備わる不合理な力、そして魂の不安さにたいして、おそらく哲学史上はじめて、明確な形而上学的輪郭を与えたのである。

※本稿は、『白山哲学（東洋大学哲学科紀要）』（二〇一九・二〇二〇年）に掲載された二つの論文の続編にあたる。また、今年度の同紀要には「第四回」としてアウグスティヌスにかんする同種の論考が掲載予定である。本稿を書きあげる段階で、何名かの専門家の方からご教示を受けた。内容の稚拙さゆえに、その方々のお名前をあげることは差し

控えるが、ここに記して感謝を申し上げたい。

主な引用・参考文献

- ・『プロティノス全集（全四巻・別巻二）』（田中美知太郎監訳、中央公論社、一九八六～八八年）『プロティノス『エネアデス』の全邦訳。各論攷のはじめに詳細な要約および解説が付されている。』
- ・Plotinus, *The Enneads*, ed. Lloyd P. Gerson (Cambridge, 2018). 「今後定番になるだろう『エネアデス』全編の最新英語訳」
- ・『新プラトン主義を学ぶ人のために』（水地宗明・山口義久・堀江聡（編）、世界思想社、二〇一四年）。『プロティノスを起点とする「新プラトン主義」の古代から現代までの思想的展開を総覧する、教育的でありながらも意欲的な論集』
- ・A. G. Long (ed.), *Immortality in Ancient Philosophy* (Cambridge, 2021). 「古代の主要な哲学者における魂の不死性の議論を扱った論集。Gerson による論文「プロティノス：不死性と人格的同一性の問題」(Plotinus on Immortality and the Problem of Personal Identity) を含む。』
- ・Dominic J. O'Meara, *Plotinus: An Introduction to the Enneads* (Oxford, 1993). 「プロティノスの思想の全体像にかんする簡潔な入門書」
- ・西村洋平『プロティノスの魂論の構造と諸問題』（慶應義塾大学博士論文、二〇一四年）。『プロティノスの魂論を包括的に論じた博士論文。今回の拙稿の出発点となった。書籍化が待たれる。』
- ・堀江聡『プロティノス第六論攷「魂の肉体への降下について」』（『新プラトン主義研究』第十一号、二〇一二年）。「本稿で取り上げた論攷の新たな邦訳と、それに対する解釈がなされている。』
- ・ハンス・ヨナス『グノーシスと古代末期の精神（全三部）』（大貫隆訳、ぶねうま舎、二〇一五年）。「特にその第二部第六章からは、今回の論考を執筆するにあたり最も啓発を受けた。プロティノスをニーチェ的な「力」の哲学の先駆者としても描いているように感じられる。』

・井筒俊彦『神秘哲学』（岩波文庫、二〇一九年）。「プラトンとアリストテレスの思想の延長上にプロティノスの「神秘哲学」が置かれるが、プロティノスが魂の「下降面」を形而上学化したことで、前二者とは異なる境地を示すに至ったことを、井筒は的確に指摘している。」

・エマニュエル・レヴィナス『実存から実存者へ』（西谷修訳、ちくま学芸文庫）。「非人称の「ある」から「実存者」が生まれる事態を、レヴィナスは「実詞化」（イポスターズ）と呼んだ。この「イポスターズ」はギリシア語の「ヒュポスタシス」に由来する。この言葉の使用からも、訳注（二〇四頁以下）で西谷が述べるように、プロティノスとの関連がうかがえる。西谷は本稿でも取り上げた「三つの原理的なものについて」との関連を示唆するが、むしろ「永遠と時間について」における魂の降下と時間化の話の方がレヴィナスの思想とより密接な連関があるように思われる。」

・檜垣立哉『西田幾多郎の生命哲学』（講談社学術文庫、二〇一一年）。

・檜垣立哉『日本哲学原論序説 拡散する京都学派』（人文書院、二〇一五年）。「生命と時間、その二つと形而上学的思考との結びつきを、檜垣はこれまで一貫して注視してきた。西田哲学が問題となっている箇所で、「西田が論じたいのは、「永遠」という、それ自身は「絶対無」的な領域にむすびつく位相を、「いま・ここ」という水平的な位相の中に「非連続の連続」としてくみこみ、そこで自覚的な自己限定の働きを解明することなのである」（二十二頁）と彼は記す。西田とプロティノスとは、永遠の時間的な縮減とそれを担う主体をめぐって同様の問題に直面していたのではないか。」